

# 鵺

世阿弥作

季は	地は	シテ	ワキ	後	シテ	ワキ	前
四月	摂津	鵺の 霊	前に 同じ。		船人	旅僧	

ワキ次第 「世を捨人の旅の空。く。来し方何処なるらん。

詞 「是は諸国一見の僧にて候。我此程は三熊野に参りて候。又是より都に上らばやと思ひ候。

道行 「程もなく。帰り紀の路の関越えて。く。猶行く末は和泉なる。篠田の森を打ち過ぎて。松原見えし遠里の。こゝ住の江や難波潟。蘆屋の里に着きにけり。く。

ワキ詞 「急ぎ候ふ程に。是は早津の国蘆屋の里に着きて候。

日の暮れて候ふ程に。宿を借らばやと思ひ候。

シテサシ 「悲しきかなや身は籠鳥。心を知れば盲亀の浮木。

たゞ闇中に埋木の。さらば埋れも果てずして。亡心何に残るらん。

一声 「浮き沈む。涙の波の空穂舟。

地 「こがれて堪へぬいにしへを。

シテ 「忍びはつべき隙ぞなき。

ワキ 「不思議やな夜も更方の浦波に。幽かに浮び寄る物

を。見れば聞きしに変らずして。舟の形は有りながら。唯埋木の如くなるに。乗る人影もさだかならず。あら不思議の者やな。

シテ「不思議の者と承る。其方は如何なる人やらん。もとより憂き身は埋木の。人知れぬ身とおぼしめさば。不審な為させ給ひそとよ。

ワキ「いや是は唯此里人の。さも不思議なる舟人の。夜々来ると言ひつるに。見れば少しも違はねば。我も

不審を申すなり。

シテ「此里人とは蘆の屋の。灘の塩焼く海士人の。類ひを何と疑ひ給ふ。

ワキ「塩焼く海士の類ひならば。業をば為さで暇ありげに。夜々来るは不審なり。

シテ「実にく暇の有る事を。疑ひ給ふも謂あり。古き歌にも蘆の屋の。

ワキ「灘の塩焼き暇なみ。黄楊の小櫛は刺さず来にけり。

シテ「我も憂きには暇なみの。

ワキ「汐にさゝれて。

シテ「舟人は。

地「さゝで来にけり空穂舟。く。現か夢か明けてこ

そ。みるめも刈らぬ蘆の屋に。一夜寝て海士人の。

心の闇を弔ひ給へ。有難や旅人は。世を遁れたる

御身なり。我は名のみぞ捨小舟。法の力を頼むな

り。く。

ワキ詞

「何と見申せども更に人間とは見えず候。如何なる

者ぞ名を名乗り候へ。

シテ詞

「是は近衛の院の御宇に。頼政が矢先にかゝり。命

を失ひし鶴と申し、ものゝ亡心にて候。其時の有

様委しく語つて聞かせ申し候ふべし。跡を弔うて

賜はり候へ。

ワキ

「さては鶴の亡心にて候ふか。其時の有様委しく語

り候へ。跡をば懇に弔ひ候ふべし。

地クリ「さても近衛の院の御在位の時。仁平の頃ほひ。主上夜な夜な御惱あり。

シテサシ「有験の高僧貴僧に仰せて。大法を修せられけれども。其しるし更になかりけり。

地「御惱は丑の刻ばかりにてありけるが。東三条の森の方より。黒雲一村立ち来つて。御殿の上におほへば。必ずおびえ給ひけり。

シテ「即ち公卿詮議あつて。

地「定めて変化の者なるべし。武士に仰せて警固有るべしとて。源平両家の兵を撰ぜられける程に。頼政を撰び出だされたり。

クセ「頼政其時は。兵庫の頭とぞ申しける。頼みたる郎等には。猪早太。唯一人召し具したり。我身は二重の狩衣に。山鳥の尾にてはいだりける。尖矢二筋。滋籐の弓に取り添へて。御殿の大床に伺候して。御惱の刻限を。今やくと待ち居たり。さ

る程に案の如く。黒雲一村立ち来り。御殿の上におほひたり。頼政きつと見上ぐれば。雲中に。怪しき者の姿あり。

シテ「矢取つて打ちつがひ。

地「南無八幡大菩薩と。心中に祈念して。よつびきひやうと放つ矢に。手答へしてはたと当る。得たりやおうと矢叫びして。落つる所を猪早太。つゝと寄りてつゞけさまに。九刀ぞ刺いたりける。さて

火を灯し能く見れば。頭は猿尾は蛇。足手は虎のごとくにて。鳴く声鶴に似たりけり。恐ろしな子ども。愚かなる形なりけり。

ロンギ地「実に隠れなき世語りの。其一念を翻へし。浮ぶ力となり給へ。

シテ「浮ぶべき。たより渚の浅緑。水のかしはに有らばこそ。沈むは浮ぶ縁ならぬ。

地「実にや他生の縁ぞとて。

シテ「時もこそあれ今宵しも。

地「なき世の人に合竹の。

シテ「棹取り直し空穂舟。

地「乗ると見えしが。

シテ「夜の波に。

地「浮きぬ沈みぬ。見えつ隠れ絶々の。幾重に聞くは  
鶴の声。恐ろしや冷ましや。あら恐ろしや冷まし  
や。(中入)

ワキ歌

「御法の声も浦波も。く。皆実相の道弘き。法  
を受けよと夜と共に。此御経を讀誦する。く。

一仏成道觀見法界。草木国土悉皆成仏。

後シテ

「有情非情皆共成仏道。

ワキ

「頼むべし。

シテ「頼むべしや。

地「五十二類も我同性の。涅槃に引かれて真如の月の。

夜汐に浮びつゝ是まで来れり。有難や。

「不思議やな目前に来る者を見れば。面は猿足手は  
虎。聞きしにかはらぬ変化の姿。あら恐ろしの有  
様やな。」

「さて我悪心外道の変化となつて。仏法王法の障  
りとならんと。王城近く遍満して。東三条の林頭  
に暫く飛行し。丑三つばかりの夜な夜なに。御殿  
の上に飛び下れば。」

地「即ち御悩しきりにて。玉体を悩まして。おびえた  
まいらせ給ふ事も。我なす業よと怒りをなすに。  
思ひもよらざりし頼政が。矢先に中れば変身失せ  
て。落々磊々と地に倒れて。忽ちに滅せし事。思  
へば頼政が矢先よりは。君の天罰を当りけるよと。  
今こそ思ひ知られたれ。其時主上御感あつて。獅  
子王と言ふ御剣を。頼政に下されけるを。宇治の  
大臣賜はりて。階をおり給ふに。折節郭公音づれ  
ければ。大臣とりあへず。」



シテ「ほとゝぎす名をも雲井に上ぐるかなと。仰せられければ。

地「頼政右の膝をついて。左の袖をひろげ。月を少し目に懸けて。弓張月の入るにまかせてと仕り。御剣を賜はり。御前を罷り帰れば。頼政は名をあげて。我は名を流す空穂舟に。押し入れられて淀川の。よどみつ流れつ行く末の。宇渡野も同じ蘆の屋の。浦わの浮洲に流れ留まつて。朽ちながら空

穂舟の。月日も見えず暗きより。暗き道にぞ入りにける。遥かに照らせ山の端の。く。月と共に海月も入りにけり。海月と共に入りにけり。